

## JACTFL 発足に寄せて

理事 藤井 達也

私は現在の勤務校で中国語を教え始めて今年度(2013年度)末でまる15年となる。会誌第1号に書かせていただくのに卑近な例で恐縮だが、教え始めてから公私いろいろな場面で「高校で中国語を教えている」という話をすると、そんな学校あるんですかとか、変わってますねという反応が返ってくる。教育関係以外の方ならある程度受け入れられるが、同じ県内の公立高校の先生方でも似たようなものだし、同じ職場の、同じく外国語教育に携わる英語の先生からも「教えている高校はどれくらいあるんですか」と新鮮な顔つきで聞かれたりすると、もう少し日頃から興味があっても良さそうなものだという気持ちが心の中に残る。どうせ大部分の先生は関心なんてないものだと割り切れれば気にならなくなるのだろうが、自分の考える外国語教育の果たす役割の大切さと現実とのギャップの深刻さを考えると単純に受け流せない気持ちがある。こういったやりとりが時に大学で教えている先生方と話している中でも出てくると、なぜ関心を持とうとしないのかという気持ちもより強くなる。

「英語だけでも大変なのに」、「へえ、じゃあ、あなたは中国語が話せるんですね」、「どういった子が勉強しているんですか」、「学んだ生徒さんはその後どうするのですか」、「何人くらいいるんですか」……。一つ一つ書かないが、個々の反応からはその背景にある外国語学習に対する考え(思いこみ?)が見えてくる。

また多くの場合、話している相手は、私が第二外国語として中国語を教えていると思いで会話している(勤務校には所謂一外・二外の別はない)。学んでも大してものにならない、役に立たない、受験に関係ないなど様々な雰囲気を感じ取ることもある。これらもまた社会に定着してしまったものなのだろう。一方教える側の先生と話していて中国語教育の可能性を過小評価しているのではないかと思う場面にも出会ったこともある。私自身まだまだ不勉強だが、様々な角度からもっと生徒を伸ばせる、これからの社会に寄与できる、中国語教育だからこそその価値があると信じて実践されたいのにとすることもあったのだ。外国語教育を取り巻く問題点、改善点は多岐多様であり、多層にわたっているように思う。

こういった状況は、様々なお立場でいろいろな場面でご尽力されている方々によって少しずつ変わっているところもある一方で、この15年間そう変わっていないと思うこともしばしばあり、徒労感に襲われることすらある。

ひとりで嘆いていても始まらない。何よりも目の前にいる生徒のためにより良い学習環境を整え、学習したことをより適切に今後の学び、自己成長につなげられるよう努力したい。高校の中国語教育に携わるものとして JACTFL 発足時に参加できたことをうれしく思うとともに、道のりは遠く険しいかもしれないが、この JACTFL が外国語教育を改善していくためにより多くの人に関わっていけるプラットフォームとなりうると考える。

多くの人々が外国語教育の価値を多くの角度から認め、教育に携わるものは学習者の経験、資質、環境を生かしてより豊かな力を持つ次世代を育てようと力を合わせていく。英語以外の言語を学ぶことが「変わったこと」でなく、たくさんの方がより複数の言語を学び、多くの価値を認め、互いに尊敬の念を持ちながら、生き生きとした社会を生み出していく。そんな未来を信じている。

(埼玉県立伊奈学園総合高等学校)